様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０１２２４

研究課題名（和文）軍事環境下の子どもの医療人類学的研究―沖縄戦から連なる暴力的状況に着目して

研究課題名（英文）A Medical Anthropological Study of Children in Military Environment: Focusing on the Violent Contexts continuing from the Battle of Okinawa

研究代表者
北村　毅（Kitamura, Tsuyoshi）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：００４５４１１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通して、沖縄戦による人的・社会関係資本の喪失、ならびに、米軍統治下の生活環境の軍事化に伴う社会変動によって、子どもを取り巻く環境がどのように変化してきたのかを検証し、軍事環境が子どもに与えてきた心理的影響の実態を一定程度明らかにすることができた。海外の先行研究から多くの知見を得ながら研究を進め、派生的な研究展開も含めた成果は、雑誌論文4件、学会発表2件、図書3件の合計9件となる。コロナ禍で予期せぬさまざまな制約を課せられる中での調査研究であったが、それでも多分野の研究者と交流し、当事者との出会いを通して研究と社会との接点を強く意識しながら研究を展開できたことの意義は非常に大きかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、沖縄を取り巻く精神保健上の問題の中でも、子どもに対する暴力、ならびに、子どもによる暴力について取り上げ、特に前者について沖縄戦とその後の軍事環境による精神的被害との関わりのもとで検証しようとするものである。戦争（状態）と子どもの精神的被害との関連について検証する研究は少なく、本研究では、この問題に沖縄を事例として医療人類学的にアプローチした。家族やコミュニティの回復に向けた支援のあり方を考えるためにも、戦争という最大級の人災が人びとの心に与えてきた長期的影響について、家族やコミュニティの歴史を紐解くことで明らかにしようとする本研究の学術的・社会的意義は大きいといえる。

研究成果の概要（英文）：Through this research, while learning much from overseas studies, I was able to examine how children's environments changed due to the loss of human and social capital caused by the Battle of Okinawa and social changes associated with the militarization of the living environment under U.S. military rule, and to some extent clarify the actual psychological impact of the military environment on children. At the end of the research period, the total number of outputs is nine: four journal articles, two conference presentations, and three books. Although the research was conducted under various unforeseen restrictions imposed by the Corona pandemic, it was extremely significant that we were able to conduct our research while maintaining a strong awareness of the connection between research and society through exchanges with researchers in many fields and encounters with the tojisha.

研究分野：文化人類学

キーワード：沖縄　医療人類学　子ども　軍事環境　沖縄戦

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、「トラウマ」という概念の広がりとともに、「心のケア」に対する社会的関心が高まっている。戦争や自然災害によって壊滅的な被害がもたらされた（ている）地域に住む人々の精神的被害は長期化・複雑化する傾向にあり、そこからの回復に向けた実践的な支援のあり方は世界規模の課題である。

戦争の「トラウマ」をめぐっては、これまで主に精神医学、心理学などの分野で実証的研究が試みられてきた。沖縄戦に限っても、公衆衛生学の観点から當山冨士子、社会学の観点から保坂廣志、臨床心理学の観点から吉川麻衣子、精神医学の観点から蟻塚亮二などの研究が挙げられる。2006 年には、早稲田大学、一橋大学、琉球大学の研究者・精神科医が中心となり、沖縄戦ならびに戦後沖縄の特殊な歴史的・社会的状況がコミュニティに与えた影響について学際的に検証する研究プロジェクト「沖縄トラウマの学際的共同研究」が立ち上げられた。さらに、2011 年には、戦争トラウマの学術的検討を目的として、沖縄の精神保健関係者が「沖縄戦・精神保健研究会」を発会し、翌年同会のメンバーによって沖縄戦体験者のＰＴＳＤに関する大規模調査が実施されている。

以上の通り、2000 年代後半以降に沖縄戦のトラウマ研究が盛んになったが、それらの多くが戦争体験者個人の「トラウマ」を対象とする研究に留まっている限界もある。沖縄では、戦後一貫して、精神疾患、性暴力、虐待、いじめ、自殺などが非常に高い数値で発現していることが各種調査によって明らかになっているが、これらコミュニティの精神保健上の問題と「沖縄戦のトラウマ」といった問題領域との関連については、前掲の蟻塚など、多くの論者が指摘しつつも、実証的な研究は皆無である。すなわち、戦争体験者個人だけではなく、その後続世代への影響を含めた学術的検討については不十分といわざるをえない。

２．研究の目的

本研究は、以上の研究動向を踏まえ、沖縄を取り巻く精神保健上の問題の中でも、子どもに対する暴力（虐待、性被害など）、ならびに、子どもによる暴力（青少年の非行、いじめなど）について取り上げ、特に前者について沖縄戦とその後の軍事環境による精神的被害との関わりのもとで検証しようとするものである。

戦争と子ども虐待、ならびに、軍事環境と子ども虐待の関係についての実証的研究は端緒についたばかりであり、国内では、森茂起らによる『〈戦争の子ども〉を考える』（2012）など、僅少である。沖縄の場合、このような問題にアプローチするためには、戦後の軍事環境も含めた複合的な要因に注目し、「子ども」というヴァルネラブルな（脆弱性を有した）存在を補助線として、沖縄戦から連なる暴力的状況による精神的被害の歴史的・社会的文脈を丹念に検証する必要がある。戦争トラウマに関する研究は数多く存在するが、戦争（状態）と子どもの精神的被害との関連について検証する研究は少なく、本研究では、この問題に沖縄を事例として医療人類学的にアプローチした。

３．研究の方法

本研究では、沖縄戦による人的・社会関係資本の喪失、ならびに、米軍統治下の生活環境の軍事化に伴う社会変動によって、子どもを取り巻く環境がどのように変化してきたのかを検証し、軍事環境が子どもに与えてきた心理的影響の実態を明らかにした。

そのための具体的な研究内容は、以下の通りである。

①戦時体制下ならびにその最終局面としての沖縄戦で子どもが置かれた状況に注目しながら、「子ども」という視点から沖縄戦の証言を整理し、子どもの戦争体験の特質について検討した上で、沖縄戦とその後の米軍統治によって子どもを取り巻く環境がどのように変化してきたのかを検証した。

②米軍統治下の子どもに関する公文書や各種調査などを参照しつつ、子どもや若者が社会問題化したケースなどを検討し、精神保健・福祉の観点から子どもやコミュニティに対する軍事環境の影響を検証した。子ども時代に基地の周辺などで育った人などを対象に聞き取りを行う予定であったが、コロナ禍でほとんど実現できず、手記や自治体史・字誌を中心とした文献資料をもとに検討を行った。

４．研究成果

（2019 年度）研究初年度においては、戦時体制下ならびにその最終局面としての沖縄戦で子どもが置かれた状況に注目しながら、「子ども」という視点から沖縄戦の証言を整理し、子どもの戦争体験の特質について検討した。具体的には、まず、本研究の理論的方向性を明確にするため

に、子ども時代の戦争体験、ならびに、子どもと軍事環境に関する先行研究の収集を行った。さらに、図書館、公文書館、行政機関、研究機関などを通して、子どもの戦争体験や占領体験、戦争孤児、子どもの暴力、子どもに対する暴力、子どもの貧困などに関するデータを収集し、それらの整理・分析を進めることで、沖縄固有の軍事環境を踏まえながら、子ども時代の戦争・占領体験と戦後体験の特質について検証するための足がかりを築いた。特筆すべきは、2019 年 8 月に開催された「ＰＴＳＤの復員日本兵と暮らした家族が語り合う会」主催のイベントにおいて講演し、複数の当事者と交流できたことである。当事者への聞き取りを通した調査は次年度以降に重点的に行う予定であったが、年度内に帰還兵の家族に対するロングインタビューを実施することができたことは大きな成果であった。

（2020 年度）新型コロナウィルス感染症の拡大により、資料の整理・分析や海外の先行研究の検討が中心となった。具体的には、戦争と子ども虐待、ならびに、軍事環境と子ども虐待に関する先行研究を渉猟し、検討を進めたが、それにより沖縄固有の軍事環境を踏まえながら、子ども時代の戦争・占領体験と戦後体験の特質について検証するための研究基盤を築くことができた。とりわけ、ドイツにおける研究状況は参考となり、世代を超えた戦争の心理的影響を検証するための知見と理論的な手がかりを得ることができた。沖縄での調査はできなかったが、戦争の後遺症を抱えた女性たちが入所した「婦人保護施設」や帰還兵家族が運営する交流館を訪問したり、帰還兵家族にインタビューを行ったりと、東京都内で調査を実施できたことは重要な成果といえる。また、本研究課題と関わる成果について『北海道新聞』の論壇で発表したことは、アカデミズムの外に研究成果を開く機会ともなった。

（2021 年度）研究成果として特筆すべきは、2021 年 10 月 9 日に行われた第 6 回「日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際シンポジウム」において、指定発言者として報告したことである。同報告では、「沈黙の共謀 the conspiracy of silence」（Yael Danieli）という概念を参照しつつ、沖縄における精神保健の専門家の「沈黙の共謀」について、医療人類学的な検討を加えた。「沈黙の共謀」とは、社会がホロコーストの生存者やその家族の体験を無視したり否定したりすることで、当事者が暗に促された沈黙を意味するが、沖縄でも、戦後、社会のさまざまなレベルで「沈黙の共謀」があったことを報告した。

ポスト・コンフリクト社会では、戦争中の加害や被害の記憶が複雑に絡み合って、家族やコミュニティの中に「沈黙の共謀」が張り巡らされている。家族の中の沈黙、秘密、謎、ナラティヴの空白こそが、家族の機能不全をもたらし、次世代をアイデンティティ危機に陥れると指摘した海外の研究は多く、それらの先行研究を幅広く検討した上で、沖縄における「沈黙の共謀」の内実を明らかにしたことが、当該年度の研究で得られた重要な知見といえる。

（2022 年度）これまでに収集した史資料の解析に努め、海外の事例との比較検討を行った。また、2022 年 8 月 7 日に東京都武蔵村山市で開催された「PTSD の日本兵と家族の思いと願い証言集会」において当事者と交流する機会を得て、「戦争トラウマ」の世代間伝達についての知見を深めることができたことは大きな成果であった。同集会後の記者会見における研究代表者の発言は、同年 8 月 17 日付の『毎日新聞』にコメントとして掲載された。23 年 3 月には、西宮市で開催された当事者の交流会に参加し、戦争が家族関係に与えた影響を当事者の視点から考えるための多くの示唆を得た。世代を超えた戦争の影響をめぐるこの問題は、『文化人類学』に寄稿した 2 本の論文として派生的な研究展開を辿ったが、これは、当初予期していなかった本研究課題の副次的な成果といえる。

2023 年 3 月に沖縄での現地調査が実現し、当事者・関係者への聞き取りを実施することができた。中でも、少年兵として沖縄戦に動員され、戦後、精神的後遺症に苦しんだ当事者に長時間の聞き取りを行うことができたことは有意義であった。

研究期間を 1 年延長した 2023 年度には、2 点の研究成果（図書の分担執筆）を公表することができた。派生的な研究展開も含めた成果は、雑誌論文 4 件、学会発表 2 件、図書 3 件の合計 9 件となる。

コロナ禍で予期せぬさまざまな制約を課せられる中での調査研究であったが、それでも多分野の研究者と交流し、当事者との出会いを通して研究と社会との接点を強く意識しながら研究を展開できたことの意義は非常に大きかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 北村 毅	４．巻 87
２．論文標題 《特集》オートエスノグラフィで拓く歴史と感情――序	５．発行年 2022年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 191～205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.87.2_191	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 北村 毅	４．巻 87
２．論文標題 戦争の批判的家族誌を書く――家族のヴァルネラビリティをめぐるオートエスノグラフィ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 285～305
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.87.2_285	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 北村毅	４．巻 16
２．論文標題 戦死者の「憑依」を解きほぐす――「シャーマニズム」と「心霊」という二つの文脈から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	６．最初と最後の頁 75-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24530/jjoha.16.0_75	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 北村毅	４．巻 27(3)
２．論文標題 家族内暴力の歴史的・ジェンダー的文脈を読む――戦争体験世代の娘である虐待当事者のライフストーリーを事例として	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会臨床雑誌	６．最初と最後の頁 6-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 北村毅
2．発表標題 指定発言
3．学会等名 日本における第二次世界大戦の長期的影響に関する学際シンポジウム実行委員会・一般社団法人全国精神保健福祉連絡協議会
4．発表年 2021年

1．発表者名 北村毅
2．発表標題 戦死者の「憑依」を解きほぐす――「シャーマニズム」と「心霊」という二つの文脈から
3．学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

1．著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬 俊也、佐藤 文香、西村 明、野上 元、福間 良明	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 258
3．書名 変容する記憶と追悼	

1．著者名 竹島正、森茂起、中村江里編	4．発行年 2023年
2．出版社 日本評論社	5．総ページ数 352
3．書名 戦争と文化的トラウマ：日本における第二次世界大戦の長期的影響	

１．著者名 風間計博、丹羽典生編著	４．発行年 2024年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 372
３．書名 記憶と歴史の人類学 ： 東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関